農村計画委員長便り６　　041124

目次

1.　04 年度北海道大会農村計画部門一押し発表＆セッション講評
2.　1/8 研究会「新潟県中越地震緊急報告-農山村の自然災害に農村計画は何をなすべきか」
3.　1 月 8 日第 3 回農村計画本委員会（旅費あり）
4.　小委員会 05 年度活動計画・予算案
5.　近畿大会での OS・研究集会　**OS は 12/5 〆、研究集会企画は 12/24 〆**
6.　3 月学術研究会案
・今後のスケジュール

１　04年度北海道大会農村計画部門一押し発表＆セッション講評

2004 年度日本建築学会大会(北海道)農村計画部門学術講演会（8/29-31）では、16 セッションで 90 題の発表が行われた。　今年度は、農村計画部門の活性化と若手育成のため、各セッションごとに大会「一押し」講演を選考し、ホームページ上で表彰することを試み、あわせて各セッションの講評を司会者にまとめて頂いた。一押しの基準は、「先進的なテーマ設定」「研究への意欲や情熱」「すぐれたプレゼンテーション」「研究の完成度」などだが、今年度は試みなので判断は各セッションの司会者にお任せをした。皆さんのご意見を踏まえ、改善していきたい。

「一押し」＆セッション講評の整理は農村企画ワーキング、ホームページ上への公開はルーラルネットワーキングにお願いをした。すでにホームページ上に公開されているが、再録し、一押し発表者を顕彰したい。

講演番号：6013　発表者：　藤本友博

「市街地残存農的環境を巡る新たな局面とその背景　その２
　　市街化に伴う地域組織構造と住民意識の変化」

市街地に残存する農的環境の再生・継承に関わる発表である。市街地における農的環境の再生と継承は都市計画分野で見過ごしにされがちな課題であり、農村計画サイドから都市計画サイドに提言すべき重要課題であると考える。6012 と続き物であるが、課題設定という観点からは当該セッションで最もオリジナリティがあると思われる。また 6012 ではいくつかの地域を取り上げ、概略を比較しているが、本研究において一地域において主体の関わり方を地域住民の組織と意識から分析を行っており、定性的なアプローチとしては緻密な分析を行っている。研究課題設定の独自性とデータ提示の適切さという点で本研究を推薦したい。

講演番号：6018　発表者：大家賢介

「公共施設の運営・利用方法からみた市町村合併の評価
　　－対等合併を行った熊本県Ａ町のケーススタディー　」

対等合併の定義や類型化での特徴の整理などに不十分な部分もあるが、現在進行中である市町村合併が地域に及ぼす影響を公共施設を通して分析しようとする試みは評価される。指摘された部分を踏まえて、合併に伴う公共施設間の調整や協働のあり方が具体的に

提示できれば、市町村合併を行っていく自治体に対しての重要な判断材料になると考えられる。

講演番号：6032　発表者：宮里明日香
「全国自治体における「農村型リゾート」事業の現状に関する調査研究その 2　2003 年調査結果の概要」
　今年の発表は調査結果の報告にとどまっているが、農村型リゾートの将来的な展開にかかわる指針とそのための課題や事業主体、事業手法、地域に固有な資源の読み取りと活用手法、地域住民の主体的な関わり方など、今後の発展を期待し得る。

講演番号：6044　発表者：八幡桃子
「徳島県由岐町木岐地区における「漁村オーラルヒストリー調査」の取り組み
　　まちづくり・オーラル・ヒストリー調査報告」
　まちづくりオーラルヒストリー調査の地域への持ちかけ方から効果までを、わかりやすく説明され、魅力的なポスターを作成されていた。

講演番号：6050　発表者：　大沼正寛
「住まいの『経年価値』について　地域住環境の経年評価に関する研究(その 1)」
　住まいが経年的に獲得する価値を明らかにすることは、農村住居を再評価するうえで、きわめて重要であり、その意義は大きい。また、質疑に対する回答からは、現在の研究の位置づけについても的確に捉えられていることが明らかであり、今後の研究の進展が期待される。

講演番号　6057,58（59）　平田隆行・水野美由紀（本多友常）（３編連続の講演）
「紀伊大島 3 集落のライフサイクル変容と集落の持続性
　　傾斜環境における住空間変容の研究　その 1-3」
　この３編は長年にわたった緻密な現地調査にもとづいたものだと思う。精密なデータにもとづき、ライフスタイル、家族変遷に伴う室転用パターンを明らかにし、そこから増改築・住機能変容モデルを提示するというストーリー性があり、また最終的には空間的な次元に落とすなど、大変興味深く、かつ参考になったため（多くの方にとっても）推薦する。

講演番号　6077,78,79　中島寿，徳永悠二，佐藤一之（３編連続の講演）
「哈尼族草頂土掌房における住様式の持続と変容
　　中国雲南省・伝統的土掌房住居の空間概念に関する研究」
　本編は雲南省少数民族ハニ族の伝統住居（草頂土掌房と呼ばれる）をとりあげている。自然条件（地形）の相違に対応すると見られる二類型を設定し、それぞれの住居形態をダイヤグラム化して、いわゆる近代化の過程でどのような変容を辿ったかを分析、考察している。　分析方法は荒削りで検討すべき余地は多いが、今後さらに研究を発展させる可能性があることを評価し、３編（しいて言えば６０７９の佐藤氏・彼が中心メンバーと目される）を一押し講演としたい。

講演番号：6089　発表者：小草牧子
「紅海南西部における遊牧民の定住化に関する研究(4)
　ジブチのスラム型住居に見られる遊牧民の空間概念に関する分析」
遊牧民の定住化に関する一連の研究の第４報である。本報は東アフリカのジブチの遊牧民が定住化する際の住居の空間構成・機能と遊牧型の住居のそれらとを比較し、定住の住居空間の概念を見いだそうとする意欲的な研究である。研究全体の枠組みでは、遊牧民の定住化によって発生する新たなスラムの再発防止という社会的かつ現代的な問題に積極的に取り組んでいる。ただし、本報ではスラム住居の記述は見かけられず、ややサブタイトルと遊離した感はある。が、今後の発展が期待できる骨太の研究である。

・・・・・・・・・・・・・・・セッション講評・・・・・・・・・・・・・・・

〇エコミュージアム（6006-6009）岡田知子
４編ともエコミュージアムの創出をテーマとしている。6006 は持続可能なエコミュージアムをどのように構築、運営していくかをフローチャートにまとめているが、残念ながら欠席であった。6007 は韓国清州市において地域遺産に関する意識と評価をアンケート調査し、類型化し分析したものである。6008、6009 は美術館の建設を契機に地域の伝統文化をいかした村づくりに取り組んでおりその活動報告で、今後、エコミュージアムがどのように実現化するのかを見守りたい。

〇環境管理・環境学習（6010-6014）齋藤雪彦
環境管理・環境学習の活動内容、主体の関わり方、活動に関わる方法論が発表され、活発な議論がなされた。欲を言えば、個別の発表に関する質疑だけでなく、これら「活動内容、主体の関わり方、活動に関わる方法論」という枠組みを共通理解とした上で、それぞれ議論が進められると良かった。

〇市町村合併（6018-6023）金俊豪
近年、全国的に行われている市町村合併を主題としたセッションであり、市町村合併による「公共施設の運営・利用方法の変化を分析したもの」と「新市の市民憲章の策定過程に視点をおいて分析したもの」が２編で、圏域の変遷・設定について通勤・通学の流動から見たもの（２編：連番）と環境認知にもとづいて分析を行ったもの（２編：連番)、が発表された。主に、合併の定義や合併による地域への影響や変化について質疑応答が行われ、特に、公共施設の運営・利用方法の変化を分析した梗概に多く興味が寄せられた。

〇都市農村交流・グリーンツーリズム（6031-6036）伊藤庸一
このセッションは、農山漁村にある環境資源を環境資産として活用し、都市農村交流を活発化させ、地域活性化を図る観点からの発表である。6031-32 は、かつての列島リゾートブームで曲解された観のある農村型リゾートを本来の意味でとらえなおし、地域活性化を推進するための現状と課題に関する調査報告である。6033 は大分県安心院町におけるグリーンツーリズムの推進体制、6034 は福島県金山町における自然教育村事業をとりあげ、グリーンツーリズム展開の可能性と課題を指摘している。6035 は栃木県宇都宮市大谷における住民参加による資源活用の計画策定が観光町づくりに有効であることの検討、

6036 は神奈川県藤野町における廃校を拠点とした流域環境保全の活動を通して都市農村交流、新旧住民の交流が活溌になった事例報告である。地域活性化の目標も地域資源も活性化手法も多様であり、さらに事例研究の展開が必要であるが、一方、効果や手法についての体系的な整理もすすめる必要がある。その意味で 6032 の今後の発展が期待される。

○集落景観（6037-6041）山口忠志

冊子や物語からみた景観、土地利用から見た景観、民家建築から見た景観、風土条件から見た景観と、多様な視点から集落景観に対する考察がされた。各々の研究について、興味深い結論が導かれたが、伊藤の報告にあったように、景観は本来さまざまな背景や条件を踏まえて、考察が行われるべきものであるが、景観構成要素の分析や、景観特性の要因分析を深める中で、全体像や方向性が見えなくなる傾向にあり、研究手法として、調査結果を集落景観全体へフィードバックしながら、細部を考察することを、再確認する必要があると感じた。

○まちづくり・地域づくり（6042-6045）斎尾直子

農村におけるまちづくり・地域づくりに近年採用されている調査方法・手法（住民意識アンケート調査,オーラルヒストリー調査,環境 評価ツール,ワークショップ等）に関する課題や効果に関し、比較しつつ意見交換することができた。6046 は地域づくりにおける空間分析、6047 は地域づくりを支える住民の労力負担分析である。各々、発表者と聴衆が近いポスターセッションという方法を生かした有意義なディスカッションが行われた。

○生活空間（6048-6052）黒野弘靖

５題のテーマは、和風住宅の室内についてのイメージを扱ったもの（6048)、沖縄の集落における敷地内空間の構成を扱ったもの（6049)、住まいの経年価値の分析手法を扱ったもの（6050)、藁を素材とした壁の吸湿性能を扱ったもの（6051)、滋賀県北部の集落における風環境と住宅の向きを扱ったもの（6052）であり、それぞれ異なっている。住まいを、そこに暮らす居住者の視点から捉えた研究として、6049 と 6050 の 2 題が注目された。

○住空間と集落空間（6053-6059）栗原伸治

多くの発表が、これまでの長年の緻密な現地調査にもとづいた研究成果であり、安心して聞けるものであった。また、住空間、集落空間の分析に際しては、空間構成要素のなかで地域に特徴的なものを中心にとりあげており、興味深いものが多かった。

○定住施策（6064-6069）川嶋雅章

中園・山本(6064・6065)は、ふるさと島根定住財団による行政による空き家の「借り上げ＋助成金制度型」システムを紹介したもので、他地域でもＵＩターン促進への活用が期待される。岡崎（6066）は、Ｕターン者の転入要因に着目し、土地にもともと存在する交流・活動・文化の見直しを指摘している。石渡（6067）は、中山間集落の住環境評価が異なることから、不公平感のない施策が求められるとしている。北島（6068）は、地域づくりのアクションなしでも社会変化適応能力のある安定型地域があることに着目し、地域構造を明らかにしようとしているものである。田原(6069)は、制作者による農村モデルの情

報発信を、地域住民の意識の関係と波及効果に着目したものである。

〇地域施設（6070-6076）月舘敏栄

７件の研究内容は高齢者施設関係３件、教育施設の運営関係２件、施設立地関係１件、施設機能関係１件であった。研究内容は基礎的段階にあり、今後の発展を期待できるレベルであった。事例研究の紹介と研究成果の関係が判りにくかった。

〇海外（１）（6077-6083）三橋伸夫

台風の影響で講演番号６０８０、６０８１の２題が発表なしとなった。講演はいずれも中国を対象とするもので、雲南省の少数民族の伝統住居（３編)、遼寧省瀋陽市の都市型住居（１編)、および伝統住居の原型文責（１編）浙江省常熟地方の地域空間構成（１編)、中国映画にみる家族関係（１編）となっている。住居を中心とした生活空間の分析という従来の手法を用いたものが多い中、家族関係に着目した研究の視点が斬新であるが、事例的な展開であって今後の展開が待たれる。

〇海外（２）（6084-6090）伴丈正志

研究対象地域の広がりとテーマの多様さ、さらには発表者の年齢層・研究歴の幅を読み取ることができるセッションであった。セッションとしてのまとまりにはやや欠けるきらいはあるが、これらの中から新しい研究の萌芽が生まれる可能性を期待したい。

２　1月8日・冬季研究会　「新潟県中越地震緊急報告－農山村の自然災害に農村計画は何をなすべきか」

当初、1 月 8 日の本委員会にあわせ、田園建築・景観デザイン小委員会企画による冬季研究会を計画していたが、新潟県中越地震が発生し山間集落でこれまで経験したことのない集落孤立などの被害が発生した。農村計画メンバーの方々からも今回の地震や自然災害に関する提案や要望が寄せられた。そこで、急遽、テーマを表題に変えた研究会に変更した。会告〆が迫っていて、関係者にご迷惑をおかけし、またご無理をお願いしたが、状況を勘案して頂きたい。日本建築学会の催し物案内をみてすでに取材が寄せられていて、関心の強さを感じる。

あわせて、この件に関し、日本建築学会特別研究委員会設置申請と文部科学省科学研究費・企画調査申請も行った。1月8日の冬季研究会の議論を待って、災害復旧支援を検討する研究会を立ち上げるなど、実働を考えていきたい。

冬季研究会　「新潟県中越地震緊急報告－農山村の自然災害に農村計画は何をなすべきか」

〇趣旨

新潟県中越で震度７の大地震がおき、農山村に点在する小規模集落は交通網、通信網、電気、ガス、水などのライフラインが寸断し、孤立集落が発生するなど、広範囲で大きな被害が発生した。地震に先立つ台風の大雨で地盤がゆるんでおり、被災をさらに大きくした。中越あたりの山間は数メートルの雪が積もる豪雪地帯で、雪への備えもままならない

状況が続いている。農山村の過疎化、高齢化は顕著であり、自然災害による農山村集落の被害は今後、ますます増大すると考えられる。そこで、新潟県中越地震の緊急報告をお願いし、そのうえで、農山村型自然災害に対し農村計画は何をするべきか、農村計画が取り組むべき課題は何かについて議論を深めたい。

〇プログラム

趣旨説明：伊藤庸一（日本工業大学）

司会：黒野弘靖（新潟大学）

セッション１　新潟県中越地震緊急報告

・「十日町を事例に」　浦上健司（日本大学）

・「川西町を事例に」　内田文雄（山口大学）

・コメント　前田真子（奈良女子大学）

セッション２　ワークショップ・農山村の自然災害に農村計画が取り組む課題

・課題別ワークショップ

・全体討論

日時・場所・定員・会費

2005 年 1 月 8 日（土）14 時 00 分～ 17 時 00 分

建築会館会議室・定員 30 名（定員になり次第締め切り）・会員 1000 円

３　1月8日・第３回農村計画本委員会（旅費あり）

・1 月 8 日（土）10:30 ～ 13:00 を予定、詳しくは建築学会事務局・伏見さんから案内

・当日は旅費を支給の予定だが、当初から予算不足のため全額至急が難しくなることもある。場合によっては 7 割支給などになることもあるので、ご了解をお願いしたい。

・主な議題は、今年度の活動についての反省、次年度の活動計画と予算（次年度で委員会組織が改組になる）、近畿大会における OS・PS・研究集会、地震など自然災害・復旧支援に対する活動など。

４　小委員会05年度活動計画・予算案

上記本委員会での主要議題になるので、11/15 〆までに建築学会事務局に寄せられた農村計画各小委員会の 05 年活動計画、および予算案を紹介する。

なお 04 度の予算総額は　1,366,000 円　（内訳は本委員会　376,000 円、各小委員会　165,000 円× 6 ＝ 990,000 円）であった。大会発表数や出版数、シンポ・講演などが勘案され、さらに予算が厳しくなりそうである。本委員会でご検討をお願いしたい。

〇農村エコシステム小委員会

最終年度となるため､これまでの事例踏査などを踏まえて①農村エコシステムとは何か、その計画論的な意義はどこにあるか、②農村エコシステムの視点に立った計画方法論・計画手法の解明、に焦点を当てた論の構築を試みたい。

このための研究会を、各委員がフィールドとする事例地域での現地研究会１回を含め、２回程度実施する。現地研究会の候補地は検討中である。

研究会での討論を踏まえ、農村エコシステム研究の到達点と課題を論じる公開研究会を

実施し、そのためのレジメと議事の記録のとりまとめをもって成果物とする。公開研究会において議論を深めることができた場合、出版等の可能性も引き続き検討する。
希望予算　216,300 円

〇農村計画システム小委員会

2005 年度は現在申請中の科研費研究①「ダウンサイジング期における農都共生型地域再生計画手法に関する研究」、②「ダウンサイジング期の都市再生方策に関するヨーロッパ事例研究」、③「ヨーロッパにおける農村地域再生のための計画手法に関する研究」について小委員会委員挙げての共同研究を実施する予定である。しかし、仮に科研費申請が全て「不採択」となった場合は、上記都市計画分野の研究者、実務家との共同による都市近郊農村地域における農的環境をめぐる農都共生型地域再生計画手法の事例研究、制度研究を中心に実施し。併せて各当該地域への成果の還元、住民、行政に向けたシンポジュウムやセミナーの開催を追究する。
希望予算　209,600 円

〇情報交流小委員会

農村計画における「住民自治」をキーワードとして、全国から集まる委員の地域での農村計画・まちづくり活動に関わる内容を事例として取り上げながら、公開研究会および現地交流会を開催する。これにより、若年層や女性の参加につとめる。

また、記録をホームページ上に公開するなどし、農村計画のデジタルアーカイブの構築を試みる。

さらに、これらの公開研究会や現地交流会の記録をベースとしながら、小委員会で、さらに議論を継続的におこない、農村計画における情報交流の方向性をとりまとめ、出版へと繋げていくことを想定している。

一方で、引き続き、国際交流としてのワークショップの可能性を検討・調整を行うものとする。
希望予算　438,340 円

〇集住文化小委員会

①公開研究交流会の企画・開催

予定地として中国・青島他があがっているが詳細は未定である。

②大会研究協議会の開催

昨年度刊行した「集住の知恵?美しく住むかたち」を題材にして大会（近畿）農村計画部門にて研究協議会を企画・開催する。

③公開研究交流会の成果の出版企画

これまで本小委員会が積み重ねてきた公開研究交流会は既に９回、今年度には１０回となる。この成果を整理し、出版企画を議論する。

④小委員会の開催

上記活動のため年に３回小委員会を開催する。
希望予算　771,580 円

〇ラーバンデザイン小委員会

2005 年度は年度内の出版を目指し、執筆分担・原稿依頼など具体的な編集作業に取り掛かる予定である。

また、今年度は当小委員会の最終年度として、ラーバン実現化のためのプログラムについて検討する。具体的には都市的、農的土地利用の混在や都市的生活者の流入による混住が見られる地域の構造化を行い、ラーバンの基本フレームに近い形の「実例」を探しその成立条件を引き出す。また、その過程で大会時に研究懇談会を開催し、広く意見を集める予定である。

さらに秋季には日韓合同のシンポジウムに小委員会として主体的に関わり、ラーバン研究の国際化に向けた一歩を踏み出す予定である。

希望予算　207,270 円

５　近畿大会でのOS・研究集会　**OS は 12/5 〆、研究集会企画は 12/24 〆**

次年度の建築学会大会は近畿大学で、9 月 1 日～ 3 日に開催される。農村計画部門での研究集会についてこれまでの提案をまとめると、以下になる。

近畿大会研究協議会　仮テーマ　集住の知恵　　企画：集住文化小委

PD　　仮・農山村型自然災害の復旧支援計画？　　企画母体：未定

OS　　仮・村づくりワークショップ

回答期限が迫っているので、ご意見をお願いしたい。

６　3月学術研究会案

3 月 3 日の関東支部研究発表会のあわせ、本委員会と関東支部農村建築部会との共催で学術研究会を開こうと検討を進めている。テーマは、学位論文の発表を軸にして、仮・農村計画研究の新しい動き？である。ご了解をいただければ関東支部農村建築部会に企画をお願いする予定。ご意見をお願いしたい。

・今後のスケジュール

12 月 5 日（金）　OS、PS 提案、梗概細分類変更　締め切り

12 月 7 日（火）　学術推進委員会

12 月 24 日（金）　大会研究集会企画回答締め切り

1 月 7 日（金）　学術推進委員会・研究集会企画承認

1 月 8 日（土）　**農村計画第 3 回本委員会**・冬季学術研究会

3 月 3 日（木）　3 月学術研究会？

3 月 17-18 日　小委員会の活動を集約し、全代議員 120 名に報告

4 月 8 日　学術推進委員会

4 月 11 日（月）　紙面投稿締め切り

4 月 17 日（日）　電子投稿締め切り

5 月 11 日　プログラム編成会議

6 月？　　春季学術研究会

9 月 1-3 日　日本建築学会大会（近畿大学）　　（文責・伊藤庸一）